

夏の終わりのことだった。

大学3年生の俺、悠斗は、

バイト探して近所のコンビニに入った。

初出勤の待ち時間、

レジの向こうにいたのが美咲さんだった。

童顔で、笑顔が柔らかくて、可愛い。

名札には「美咲」と書いてあって、

俺は一瞬「同じバイトの大学生かな？」と思った。

でも、店長が

「美咲さん、悠斗さんの指導お願いします」って言った瞬間、

彼女がにこっと笑って、

「よろしくね、悠斗くん。私、30歳の主婦だけど、年離れてるからって気を遣わないでね！」
って言われた。

30歳……？

嘘だろ、と思った。

見た目は完全に20歳前半。

色白の肌に、ぱっちりした目、小さい唇。

笑うと眉毛が見えてさらに幼くなるのが、
妙に可愛かった。

それから、バイトが一緒になるたび、
気さくな美咲さんと自然と話すようになった。

最初はシフトの引き継ぎや商品の場所。
でも、すぐに共通の趣味であるゲームの話で
盛り上がった。

美咲さんは狩りが好きで、でもめちやくちや下手らしい。
話の流れで今度一緒に一狩りいく約束をした。

夜中のボイスチャットで一緒にやって、

俺がキャリーすると、

「悠斗くん、すごい！ やつとこのクエストクリアできた〜！」
って、無邪気に喜ぶ声がヘッドセットから聞こえてくる。

俺はいつも、意地悪くからかった。

「美咲さん、またすぐ死んでるし。俺いなかったら即ゲームオーバーですよ？」

「ひどーい！ 悠斗くんこそ、1回死んだじゃん！ 知ってるんだからー！」
そんなやり取りが、毎日の楽しみになった。

一緒にいて、歳の差なんて、感じなかった。

友達みたいにいじり合って、笑い合って。

でも、俺の胸の奥で、少しずつ熱いものが溜まっていった。

美咲さんの笑顔を見るたび、

彼女の声が聞こえるたび、

触れたい、もっと近くにいたいって思うようになった。

絶対に、嫌われなくなかったから、
その気持ちは、ずっと隠してた。

——あのネカフェの夜までは。

これから始まるのは、

バイト先の先輩後輩から、

一線を越えてしまった二人の、

甘くて、熱くて、切ない物語。

美咲と、悠斗の、

秘密の時間。